
マザーテレサよりも優しい人

ネッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マザーテレサよりも優しい人

【Nコード】

N1355G

【作者名】

ネッシー

【あらすじ】

優しすぎるだろっ！！と、思わずツツコミたくなるような、そんな子たちのお話です。

あいつはバカだ、映画の中のチャップリンよりアホだ！

*

俺の友達に世界一優しい奴がいる。親友じゃない、友達だ！
まあ、幼なじみという奴なんだけれども…。

えっ？なぜ世界一かって？
そりゃ見りゃわかる。

今日は、あいつこと太陽の事を紹介していこう！

太陽はその名の通り、明るくて人の良さそうな顔をしている。

だから、よく人に道を聞かれたりする。

そして期待を裏切らず笑顔でこう返すのである。

「はいっ！　じゃあ一緒に行きましょうか！」

そして、俺にこう来る

「ダン、俺道分からないから道教えて！」

「…」

俺が道分からなかったらどうすんだ！

と思って聞いた事があるが、

「携帯のGPSで行けるかな？」

だそうだ。

今俺らは大学生だから、こういう人達に付き合ってもなんとか
たが、

高校生の時は遅刻の嵐で、風邪なんか引いた事無いのに出席日数ギ
リギリだった。

ちなみに俺じゃ無いぞ太陽がだぞ？

俺は適当に地図作って、先に学校行くだけだったから。

前にこんな事があった、ちなみに一度ではない。

学校へ行く途中

「すみません…」

と声が掛けられる。

またいつものか、と思って振り返ると、前歯が欠けていてちょっと気味が悪いお婆さんだった。

しかしそんなこと、ものともせず、隣のバカは笑顔で答える。

「どうしたんですか？お婆さん？」

「ペ ×ゴ○で地震があつて、その人達を助ける為に募金してくれませんか？」

残念ながら地名は聞き取れなかったが、そんな感じの事を言い、空ティッシュ箱を差し出してきた。

っていうか、あからさま怪しいが、隣のアホは…。

「それは大変ですね！これで少しでも足しにして下さい。」

と言い、諭吉さんを取り出す。

お婆さんはしわくちやの目を見開いて

「ありがとうございます。」

と聞き取りにくい声で言い、俺らが離れた後もずっと両手を合わせて太陽の事を拝んでいた。

あのお婆さんは寄付なんかしないで、あのお金を自分の為に使うだろう。

そんなこと分かってる、それでも俺が何も言わなかったのはワケがある。

言っても聞かないというのもあるが、コイツは知っているのだ。

あのお婆さんがウソをついたのを。

そして、そういう人達はそういう嘘をつかなければならない理由がある。

と、いう事だそうだ。

まあ俺には全然理解出来ないが、人の信念を強制するつもりは無いから黙っとくだけ。

「なあ、お前昼代あげちゃって、今月飯どうすんの?」

「ま、まあ、人間昼なんか食わなくても何とかなるでしょ!」

とか笑いながら言う。

まあ

「アホ」

としか、言いようがない。

*

太陽は小中高の卒業文集で、ほとんど同じ事を書いている。

まあ、文章は年々上手くなってきたているが、テーマは同じだ。

「世界平和っ！」

…アホだと思うだろうがマジである。

しかも、どんどん理屈っぽくなってきていて、高校の作文なんかを見ると「コイツは本当に世界を平和に出来るんじゃないか？」とさえってくる。

太陽は優しい。

映画で誰かが死ぬとすぐに泣く、

そして、誰かが傷つけられるとメチャクチャ怒る。

何か行動するときには、おせっかいじゃなく、ちゃんとその人の事を考えて優しくする。

コイツの思考回路の中を見てみたら、90%以上「他人」が占めているだろう。

ということは、太陽は自分の事を考えていないのが分かるだろ？

アイツは人に頼らなくて、全て自分でやろうとする。

頼るのは俺のみ、しかも、人を助ける時限定。

わがままなんて聞いた事無い…。

…

いや、あつたわ

*

うちの高校の時のクラスにはスゴく気持ち悪い奴がいた。

いつも同じ服を着てて、変な臭いをさせていて、喋っている所を見たことがない。

はっきり言って気持ち悪い、そいつの周りにはいつも1メートル位の空間が出来る。

昼休みに、みんなでトランプを始めようとしていた時、突然太陽が…。

「溝口君も入れない？」

と言いだめた。

一瞬誰だか分からなかったけど、太陽が指を差している方向を見て納得した。

そして、全員がいやな顔をした。

それを見て太陽は、悲しそうな顔をして

「じゃあ、今日は俺も入らない」

と言いだち、どこかへ行ってしまった。

そこに居たみんなは罪悪感の塊になる。

太陽の優しさは分かるのだが、あの臭さの中ではトランプの楽しみも半減するだろう。

その日は、用事があるからと太陽は言い、一緒に帰らなかった。

…次の日

まだ、怒ってるかな？

とか、思いながら教室まで着くと、知らない人が居た、しかも溝口の席に…。

色白でサラサラの髪をしていて、男にこんな事言つのも変かもしれないけど、素直に綺麗だと思った。

近くを通ると少しいい匂いがした。

もう来ていた友達に確認する。

「あの子、誰だか分かる？」

「さあ、わかんねえけど可愛くね？」

「男じゃねーか…。」

「まあまあ、可愛い事はたしかだろ？」

「ま、まあ」

「でも、あの子座ってんの、アレの席だろ？ 俺行つて来るわ！」

と言い、そいつが行こうとしている時、丁度太陽が入ってきて、その子に向かって、こう言った

「おはよう！溝口君！」

ビックリした…けど、俺しか気づいていない。

「なんだよ、太陽知り合いかよー！俺にも紹介してよ溝口君！」

「えっ？毎日ここに座ってんじゃん」

「はあ？なに言ってるの？ここにいつも座ってるのは、あのボサボサ頭の臭いやつだろ？」

「それ以上、溝口君の悪口言つと殴るよ？」

「……………マジ？」

「マジ」

「
…」

太陽はニコニコしてる

「そ、そうか、あの溝口だったか！そうかそうか、あの溝口がダイヤの原石だったとは気付かなかった！ハハハ…」

「
…」

溝口は喋らない

「…ごめんっ！気付かなかったんだって、だってこんなに、き、キレイになってると思わなくて！」

「
…」

「ほ、ほら笑おうぜ、な、な」

「
…」

無理やり笑顔を作ろうとしてる

「ちっげえよ！なんて言うのかな…うーん」

「…」

溝口は困っている

「よ、よし分かった、今から笑わしてやるからな！」

そっこうしてる間に太陽は俺の隣まで来ていた。

「なあお前だろ？」

「何が？」

「…まあいいや」

今、溝口は俺の友達によって腹を抱えて笑わされている

*

太陽のわがままというのはいつもこんな感じ、
アイツのわがままというのは、わがままなのに人のため、
それも、社会的立場が弱い人の為だけに使う。

これはもう、わがままでは無いのかもしれない。

こんな人の為ばかり考えて、自分の利益になることを全くしない。
あいつにこんな事を言ったら

「人の幸せは俺の幸せっ！」

と言って笑うだろう。

俺はこんな優しい奴が、まあ嫌いじゃない。

～ e n d ～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1355g/>

マザーテレサよりも優しい人

2010年11月25日14時06分発行